

パチュリー・ノーレッジは推理しない。

和心どん兵衛

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

パチュリー・ノーレッジ。たぶん、絶世の美少女。そして魔女。

本の側にいるものこそ自分である。という思想から日がな一日、本を読みふける毎日を送っている。彼女は本以外の事にあまり興味を示さない。それは例え、身近に起こった事件であつたとしても……。

本の虫である魔女と、その使い魔がやいのやいの言いながら紡ぎ出す。どこか奇怪でちよっぴり滑稽な物語。

目次

悪魔と魔女と転がる首	1
謎解きは談笑の合間に	35
謎は謎のまま今日が来る	51

悪魔と魔女と転がる首

蚊の鳴くような音すら立たない静寂と闇に包まれた空間。全ての生物が消え去ったかにも思えるこの場所には、ただ書物だけがビル街の如く立ち並ぶ。棚に収まり切れなかった物達は床に積み重ねられている。不規則に積まれたそれらが溪谷を作り上げ、一つの風景が形成されていた。

ぺらり、と紙をめくる音が木霊した。音の先にはこれまた書物の山、その隣に小さな灯。だが、その明かりは蛍の光ほど弱く儂げである。少し強い息を吹きかけるだけで簡単に消えてしまいそうだ。

危うくも消えかけそうになりつつある明かりの中に、人の姿があった。

フリル状の鍔が付いた帽子を被り、ゆつたりとした寝間着のような服を着た紫髪の少女。一見すると、この世の者ではない感覚に陥ってしまう。現実がどこか遠くへ行ってしまう、という具合に。だがそれも、少女の突然のくしゃみによつて戻される。

埃でも入ったのかと尋ねてみる。少女は首を横に振り、またくしゃみをする。症状は酷くなり、遂には咳き込んでしまった。……何とも言えない様子である。

「あのねえ、私が苦しそうに咳込んでいる様子を……つくしゆん！ ごほっ……眺めて

ないで水くらい持って来たらどうなの？」

苦し紛れに彼女が紡ぎ出した言葉は水の要求。察しはついていた。

「それもそうですよね、パチュリー様。では、お水をご用意致しますので少々お待ちください」

予め用意しておいたコップに水を注ぐ。

さて、紹介が遅れました。水が満杯になるまでの間の短い紹介となります。まず私ですが、特に名前などは存在しません。強いて言えば、『こあちゃん』の愛称があるくらいです。そして、目の前で咳込んで苦しんでいる彼女はパチュリー・ノーレッツ様。細かい話をするると華奢な身体が保ちそうにありませんので、端的に言ってしまう。私のご主人様です。

八分目まで注ぎ終えた水を彼女の側に置く。すかさず、彼女はそれを手に取り一口含む。その際、飲みながら咽るといふ器用な芸を見せた。

「三日三晩、こんな所に閉じ籠って本を読み漁り過ぎて身体が少し堪えたのでしょね。どうでしょうかパチュリー様。一度、外の空気を吸われに行ってみるのは？」

「うーん……正直、ここから一步も動きたくないわね」

「それだと他の方々に心配を掛けられますから、どうか外の空気を吸いに行きましょう」
「大丈夫よこれくらい。それに、レミイがこれしきの事で心配する訳がないでしょう？」

伊達に長い付き合いしてはいないわ。そんな訳で、私には本さえあれば良いの。ああ、それとお水。ありがとね。お陰様で、咳込み過ぎからの死亡事故を免れる事ができたわ」

「どこのお年寄りですか貴女は……」

「失礼ね。まだ百年くらいしか生きていないんだから、年寄り扱いたくないですよ」

それくらい生きてたら、十分年寄りですよ。

見た目が十代の少女にしか見えないパチュリー様。だが、これでも百年生き続けているのだから驚きです。人より長生きなされている分、中身はかなりの年長者そのもの。胡散臭い発言が言葉の端に見え隠れする事はしばしば。少くくは身体が成長しても良かったんじゃないかと思いましたが、本人曰く『魔女となった時点で身体の成長は止まる』との事。詳しい事は分からないですが、人間を卒業すると何かしらの影響が身体に出てくるみたいです。引き籠り体質もその影響でしょう。とは言え、放つてはけません。

時々、魔法の研究だと言って部屋に閉じ籠るのです。それも私が放っておけば何年経つても籠りっぱなし。頭に苔が生えていましたよ。

気づかなかつた私も私です。まあ、当時の私にも事情というのがありました。新米使い魔として赴任してまだ日も浅く、要領も悪かつたんです。ちなみに赴任して初の仕事

は、パチュリー様の身の周りに散乱する本の整理でした。本の影からゲジゲジが湧いて出て来たのは、今となつては良い思い出。生活能力が桁違いに低い主様を心底幻滅したのは、言うまでもありません。

年配者扱いされて拗ねてしまうパチュリー様。こうなつてくると、駄々をこねる子供をあやすくらい面倒になつてしまします。

「とにかく、お身体を悪くしない程度にお願いします。また一週間以上も籠られると、心配でこつちはおかしくなりそうですから」

「心配性な事は良い事で。でも、あまりお節介を焼くようだと次の実験の被験者になつてもらわね。という、私からの忠告も入れておくわね」

なぜか私が忠告される始末。使い魔は主の身を心配する事が当然だというのに、このお方ときたら全く……変な主です。

「ご忠告ありがとうございます。それとパチュリー様、本をいくつか持って参りました」「あら本当!!」そろそろストックが切れそうだったから困っていた所だったのよ。ナイ、こあちゃん!!」

本の話題になると、急に明るくなった。無邪気に咲き誇る笑顔の花は、仄暗い空間に明かるさを増し、少し肌寒かった空間が暖かくなる感覚を覚えた。

守りたい、この笑顔。まさしく目の前のコレの事を指しているのでしょうか。とはい

え、中身は腐つても一世紀以上生きた口〇ババ……少女である。一瞬だけ、殺気を帯びた冷たい視線を感じたのは気のせいだと思いたい。

内心失礼な事を語っているのを悟られる前に、厳選した本をパチュリー様に渡す。

私から本を受け取ったパチュリー様は、表紙を見るなり固まる。視線だけが、本の表紙と私の顔を交互に行き交う。そんな状態が数秒続いた後、彼女はゆつくりと口を開いた。

「……とここで、この本どう思う?」

「すぐ……えっちいです」

思春期の若人達なら共感できるであろう。というよりも、これは世の男のロマン。そう、これが君の望んだロマン——エロ本。

腐を極めし者へ送る著書、世界の始まりはアダム×アダム、またはイヴ×イヴが原点とされた——ボーイズ&ガールズラブ本。

そして新たな可能性を見出し歴史を築き始めた、男の娘本。

「長い間お粗末になられていると思いいなされたので、私自ら厳選致しました。かなりエロいです」

「何を根拠に言っているのよ」

「表紙イラスト、ストーリー性、プレイスタイル。全てにおいてです。私も一読しました

が、かなり病みつきになります。気づいたら濡れ……こほん、そのあまりの内容に濡れていました」

いっけね、うっかり濡れたとか口にする所でした。まあ、ほぼほぼ字面的にアウトな気がしますが。

怪訝な表情でいるパチュリー様の顔が、みるみる内に赤くなっていく。眉間の皺も寄り過ぎて般若みたいになっていた。

今更言い逃れできないし、かと言ってこれ以上私の悪戯に付き合わせるのも可哀そうなので、ここは黙ってパチュリー様のお叱りを受ける事にしましょう。ええ、既に私の肝は据わっています。いつでもバッチコーイなのです。これは当然の報いであるのは承知の上。でも、からかわずにはいられない。それが小悪魔な私の性分ですから。

遂に制裁を受ける、その瞬間。パチュリー様の般若のような表情は突如一変。穏やかな顔になった。

「私個人としては、人の趣味にどうこう言うつもりはないわ。でもね、これだけはハッキリさせておきたいの。私は本が好き。ええ、それこそ本さえあれば後はどうにかなるつてレベルよ。でも、それは私の好みのジャンルでないといけないの。例えば、魔術・魔法またはそれらに関する研究資料。そう、だって私は魔女だもの。日々魔法の事について日夜問わず研究してる。たまにどれくらい時間が経ったのか、分からなくなるくらい

に研究に没頭する事だつて何度もあつたわ。その都度、レミイや咲夜、みんなを心配させてしまつて本当に申し訳ないなつて思つてる。だからこそ、ここ最近は一定の周期で休息を入れてるわ。それは時に娯楽用の本、館周辺を散策、フランの読み聞かせ、レミイとお茶。魔理沙と……アレはただの厄介虫ね。そうやって、適度に息抜きを入れる事でまた新しいアイディア、インスピレーションが湧いてくるの。応援されると同様ね。それで、また長期に渡る研究にもがつつけるし、最後まで成し遂げる事だつてできたわ。

話が脱線してきたから本題に戻すけど、人は何か好きなものがあればそれに向かつてとことん追求する事ができるわ。だからね、貴女もそうであつて欲しい。それが主である私からのたつた1つの願い。……どうか、道を違えず真つすぐ素直に正直で立派な人になつて」

「パチュリー様……」

予想もしてなかつた展開になつてしまいました。穏やかな表情で優しく語りかけてくるパチュリー様は、まるで我が子に諭すかのようでした。未だかつて見た事のない母性。心の底から浄化されていくような、そんな感覚が身体の至る所に稲妻の如く走る。生まれてからずっと黒かつた私の翼が白く、光り輝いているようにも見える。

こんな表現じゃ取るに足らない、今日の前で起きている現象。この言葉しか思い浮かばない。

——尊い。

普段は根暗で奇妙な笑い声を上げるオカルト研究者みたいな人なのに、こんな時に限って母性を見せるとかズルいですよ。チートです、チート。こんなのかないつこないです。例えばバストサイズで勝ったとしても、母性で人を燻らせる事ができなければ、ただの飾り物です。

「まあ、でも……私みたいに魔法に執着し過ぎて、魔術本自体に保護魔法を掛けて耐久性を向上させる。本自体に機能性を追求するとか、変な方向に走らないようにね？ 一応、反面教師として見習うべき所もすっかり見習う事ね。貴女には期待してるわ」

時には自分の失態を例に上げて叱る様は母そのもの。いつしか、自分が主に対して行おうとしていた無礼な行為に羞恥を覚える。さつきまで悪人面して悪戯を行おうとしてた自分を、全力で殴り飛ばしたい気分に駆られた。

「パチユリー様……」

語彙力皆無(笑)。口がさつきから主の名しか言えなくなってますが、思考回路は正常です。今この瞬間、圧倒的なまでの聖なる母性の波に呑まれそうな理性を、ギリギリの所で踏ん張ってるくらいに正常ではあるんですよ。え、それは正常とは言えない？ は、何を言ってるのか分かりません。

閑話休題。こんなにも母性のあるお方が、何故に独身でいらっしやっているのか。

時々、疑問に思えて仕方がない時があります。だってほら、こうやって人をおちよくつて楽しもうとしてた私に、真摯になつて諭してくるんですよ。それでいて本人には面と向かつて言えないですけど、結構な麗人ですよ。しかも美乳。本人は根暗だとか言つて自覚がなさそうだけど、そこそこ実つた果実がネグリジエの森の奥に隠されているんですから。世の男どもがごぞつて『これが俺達の求めたロマン！』つて叫びながら迫ってくるのは想像するまでもないのです。まあ、そういう輩のほとんどは下心全開でいらつしやるものにして。害虫を駆除するのも、パチュリー様親衛隊隊長兼使い魔の私のお勤めです。そう簡単に嫁には出させんよ。

「ところで、パチュリー様にはその……殿方とかいらつしやらないのですか？」

「今このタイミングでそんな事を聞く？ どうしたのかしら、急にそんな事を聞いてくるなんて。今日はちよつと具合でも悪いのかしらね」

「いや……なんていうか。ほら、パチュリー様つて案外殿方に人気のありそうな外見してるじゃないですか。一人や二人ほど、人生でお付き合いした殿方がいないつて方が不思議ですし」

「あー……そう、よね。まあ、なくもないかもしれないわ」

「どことなく歯切れの悪い返答。これはひよつとして、ひよつとするかもしれない。下手すれば、踏み込んではいけない部分に踏み込んだかもしれないです。」

異性とのお付き合いをしたか尋ねた際、こういう目の前にいる人がするような反応は大体決まっているもの。当の本人の口から聞き出すよりも、明らかに雰囲気で分かってしまうから何とも言えない空気になってしまうものです。その為、的を若干ずらしてパチュリー様のメンタルを深く挟まない様に配慮しているんです。……察してください、今度は私の口から言わせる気ですか？

閑古鳥も鳴けずにいられないくらい、気まずい空気が漂い始める。何とかしてこの状況を打開しないと、気まずい空気の中で読書の時間を過ごす羽目になる。パチュリー様からしてみれば、心臓が潰れてもおかしくない。小悪魔的思考回路をフルに回転させて、機転を利かせつつ上手い事切り抜けるには――

「チャンスはいくらでも訪れますパチュリー様。首を長くして待つていけば自ずからと、素敵な殿方との出逢いがきつと訪れます。なんなら、レミアお嬢様にご相談してみるのがありかと」

「私より場数を踏んでいるとはいえ、どうもレミイにはこの類の悩み事を解決してくれそうにないわ。むしろ、『そんなもの不要ね。話にならないわ』って切つて捨てるでしようね。あの子、ただでさえ妹の事で悩んでそうだし。それに加えて、ここ最近は博麗の巫女にゾッコンだから。むしろ、逆にどうすれば良いのか聞かれる立場になるわ。……つたく、何なのよ、『どうしたら私に振り向いてくれるのかしら？』って。そんなの

知るかつて話。メルヘンチックな悩みに苦しまれてゐる貴女が正直、羨ましく思えるわよつての。私だつて白馬に跨つた王子様とかに憧れてるけど、そんな事なんて現実では到底起こりえないという事実を思い知らされ、妄想の範囲内でそういう展開を楽しんでいたりもしたわ。せめてのモノと言わんばかりにね。ああ、本当に憎らしい事……」

「すみません、フオローしたつもりが全くなつていませんでした。もうこれ以上の愚痴はお止めになつてください。身体に障ります。外見麗しい主様と発言内容の不一致で、主に私の身が持たないです」

「大丈夫よ、俗にこれをギヤツプ萌えと呼ぶらしいわ」

「そちらの場合はギヤツプ萎えになります！ 無理して気丈に振る舞うのは止めてください。見てるだけで、いたたまれない気分になります」

上手い事フオローを入れ、別の話題に持つて行く。という、実に小悪魔的かつスマー卜な打開策だったので、ところがどっこい。私の方が変に気遣いしすぎた為なのか、言葉選びを間違えてしまいました。お陰様で、手の施しようがありません。どうなる私の命運。

さて、こんな状況下でも一つ面白いものを見つけました。パチュリー様が案外、ロマンチストな一面を持ち合わせていた事です。齢百を超える人にしては割と初心と言いますか。やっぱり、パチュリー様も何だかんだ言つて女の子なんですわ。でなけ

れば、あんなにも嫉妬して頬を膨らませたりしないですもの。ただ、光が無い眼差しだけが少し耐え難いです。

「てりやつー！」

だからなんでしょうね。耐え切れなくなった私は、スリッパで主の頭を引つ叩いていました。すぱーん、と爽快な音が響く。

「あいたつ!?」 ちよつと、なんて事してくれるのよ痛いじゃないの！ あと、なんでスリッパ!？」

「いえいえ、ちようどパチュリー様の頭の上に埃が被っていたんです。それを払い落とそうと思ったまでです。あ、まだついてる」

「ちよ、やめなさいってば。埃どころか帽子が汚れるから」

「うむむむ……しつこいタイプの方の埃みたいです。あと二、三回は念の為に」

すぱーん、すぱーん。もういっちょ、これは胸部にすぱーん。ちなみに最後の一発は、いつも振り回している分の仕返しだ。敢えて胸部にしたのに特に理由はない。ぷるんと揺れる果実が見たかったとか、微塵も思っでなんかないません。そんな事を考える輩は三流以下なのです（自論）。

余分に叩き過ぎだったのだろうか、パチュリー様の目の端に薄つすらと零れ落ちそうな涙。今更、罪悪感が込み上がってくる。力加減、回数……いや、それ以前に何故自分

は突拍子もなくスリッパで引つ叩いたのだろう。己が行った行為というものは果たして、本当に小悪魔的かつスマートな打開策であったのだろうか。

「——悪は滅び去った」

「一体何と戦つてたのよ!？」

そんな事よりも、主様にしつこく纏い付いてた埃を振り払った達成感（嘘）に酔いしれる。

「……まあ、なんて言いますか。パチュリー様にしては随分とネガティブな発言が多かったので、少しばかりお祓い致しました」

「お祓いにしては随分と物理的だったけど?」

「時として念だけでは払いきれないものも存在するじゃないですか。とりあえず、そういう類には物理的なお祓いが効果的でしたので。今回は少々私情を含めたヤツにしてみました」

「その私情とやらに、かなりの悪意を感じたわ。これって気のせいかしらね?」

「気のせいですよ。きつと」

「そう……でも、おかしい話ね。悪魔がお祓いしたら逆に悪魔の方が浄化されるんじゃない? それに、お祓いて神職の人達が行うものよ。こんな館で、しかも神職でもない、加えて悪魔よ? むしろ自分から首を締めにいってるようなものよ」

「……………あ」

言われてみれば確かに。私は小悪魔な存在である。かえって自分の身に危険を冒しているようなもの。これが俗に言う、自分で自分の首を締めるってヤツですか。ほほう。どうりで、視界の端からキラキラしたものがちらほらと見える訳です。これって目の前のパチュリー様があまりにも愛おしく見えるからこそ、キラキラってヤツではなかったのですね。……あ、意識が朦朧とし始めてきました。これはヤバイ。

「ほら言わんこつちやない」

「そんな事言つてないで、助けてくださいパチュリー様！ 私、浄化されます。嫌だ、まだ死にたくないんですけど!?!」

「自業自得よ。いっぺんあの世に行つて反省してきたら良いかもね。それにここも当分の間は静かになるし。一石二鳥よ」

「いやいや、身の周りの事もできない生活能力皆無な人が何を言つてるんですか。そこから辺のサポートをしてくれる存在として、そもそも私を呼んだんじゃないんですか!」

「大丈夫、予備があるから。安心してお行きなさい」

「酷い!?! 道具扱いされたのにシヨックです。それよりなんで、このタイミングで論すような言い方になつてるんですか!?! 独り立ちする我が子を暖かく見送る場面じゃないんですよ?」

そこそこ長い付き合いになる使用人が、生死の境目に立たされているん

です!」

「それもうつかり、ね」

「否定しませんけど!!!」

自業自得というのは分かりきってます。主様から言われると尚更の事、心に突き刺さります。そりやもう、会心の一撃ですよ。穴があつたら入りたいこの気持ち。いとをかかし、なのです。趣は一切感じられないですが、言いたくなりました。某納言さん、本当に申し訳ないです。

「そこは否定しないのね。案外、正直で驚いたわ」

「いや、そんな所で驚かなくて良いですから。てか、案外ってなんですか案外って。私、いつも正直でいますよね? 心外です!」

「まあ、そうカツカしないで……」

「アンタが日々そうさせるような事言ってるからでしょう!」

「それは……うん、アレよ。面白い反応するから、からかいたくもなるものよ」

「もう少し時間と場所を弁えた上で、そういう事はしてください。いくらでも承りますから。それより、早く救済処置をお願いします」

「はあ……仕方ないわね」

パチュリー様は半ば呆れつつ、机の引き出しから小瓶を取り出す。中には、ぬめりの

ある黒色の液体が入っていた。

見るからにして怪しい。この上なく怪しいヤツです。無色スライムにイカ墨をこれでもかと注入して、片栗粉を少々混ぜてミキサーで調合したら出来上がりでした、みたいな液体。まさか、これがダークマターの正体とか言いませんか。よく見たら少し泡立っていますし、刺激が足りないから炭酸でも入れたんですかね。だとしたら、コーラという飲み物に非常に近い存在なのかもしれません。でもアレはラベルに成分が書いてあったから、安心安全に飲める物でありましてね。目の前のブツとは違う。

こいつは、成分表記も無い得体の知れない液体。加えて、魔女が製作した物なので怪しき百点満点。絶対の保証がされていない、危険物なのです。長年の付き合いとはいえ、飲めと言われても容易に飲めません。

「はい、これ飲んで」

「嫌です。何ですか、この不気味な液体は？」

「ヒ・ミ・ツ」

「ぶりっ子振らないで下さい、気持ち悪い。そんな事より、私の質問に答えて下さいパチュリー様。この液体は一体何なんですか？」

「辛辣ね。別に変な物なんて入れてないわよ？ いざという時に備えて調べておいた、ただの回復薬（未試験）よ。見た目は少し気持ち悪いけど……」

「とてつもなく胡散臭いですけど、一刻も時を争う状況なので今はパチュリー様を信じます」

「信頼されてなかったのは心外よ……」

そもそも、貴女は魔女という時点で頼り辛いんですよ。小悪魔な私が言えたもんじゃないですけど。

小声で愚痴を零すパチュリー様を余所に、私は受け取った小瓶の中の得体の知れない液体を一気に飲み干す。ぬめり気は見た目以上にあり、中々喉を通らなくて苦戦を強いられる。あと、この飲み心地はあまり好みではない。なんか、薄い本のシチュエーションを連想してしまうので私的にはNGなんです。

色々と問題だらけのブツですが、意外な事に味だけは美味でした。見た目から想像できない柑橘類の味が、口の中で踊るのです。

「おお、意外と美味しいです。凄いですよ、パチュリー様」

「……もん、むつきゅー」

小声で何か呟いているパチュリー様。どうやら、また拗ねたご様子です。私とした事が、また面倒な仕事を増やしてしまいました……はあ。思わず溜め息が出ちゃいますよ。

とはいえ、自分で撒いた種です。ちゃちゃつと片付けちゃいましょう。倦怠感を覚え

始めていた頭をフル回転させる。

「パチュリー様、そろそろお腹が空いてきた頃合いですよね？ 何か持ってきて参ります」

「そんなにお腹空いてないわよ。また咳き込んだ時の対処の為に必要な水、これがあれば後は大丈夫」

「またそんな事言つて……パチュリー様、前も似たような事言つて倒れていた事あつたでしょ？ もう忘れたんですか。あの時、かなり洒落にならない状況でしたからね！」

「っ……！ あれは、精神的な疲労が蓄積されただけであつて。何も栄養失調で倒れた訳じゃないんだから。うん、極めてセーフ」

「アウトです。あの時、私が駆けつけてみればゲツソリしてたじゃないですか。モヤシから水気がなくなつた状態でしたよ!？」

このお方ときたら……。

実は最近の出来事なのですが、パチュリー様は寢食問わず三日間ぶつ通しで本を読み漁つた上に倒れる。という事件を起こしていたのです。読書熱心な事は良い事ですが、度が過ぎると心身に障るものです。特に精神面からの疲労というのは尚の事。それに加え、パチュリー様はあまり体力が無いので余計に危険です。

「貴女、たまに無自覚で失礼な事言うのね」

「概ね合っているんですから、今更失礼も何もありません。私は純粋に従える者として、主様の身の心配をしてるんです」

「はいはい、分かったから。分かったから、何か食べ物持ってきて。ちよつとした口論のお陰で、丁度お腹が空いてきたから」

「最初から素直にそう言つて下さいよ」

素直じゃないなこの主。でも、そんな主を好いて堪らない私も私。大概どうかしてま
す。

主と使い魔という立場ではありませんが、先程パチュリー様にも申ししていた通り、かれこれ長い付き合いになります。

多少の本音を交えて、お互いにからかい合う。これもまた、ひとつの主従関係としては悪くない。というよりも、理想的ですよ。もやし体質な主様じゃなければ尚の事良かつた、というのは内緒です。



紅魔館。私とパチュリー様が住まう館の名称です。

その由来は、館の外観が血のように赤く人非ざる者が館内で生活しているから。他に

も諸説ありますが、特に有力なのは外観です。館の主の二つ名も関わっているとかなんとか。まあ、そこは私の管轄外の話になってきます。あくまで私の主は、パチュリー様なのですから。悪魔だけに。

周囲は自然豊かな緑色、ここだけが不気味な存在を放っており景色に酷く浮いてしまっています。なんとか色を変えてくれないものでしょうか。館の主が怒るのは間違いないと思います。

そんな館の地下には大図書館と呼ばれる場所があります。ここが主に私とパチュリー様の管轄区域となっております。風通しが悪い上、日当たりもないのでカビ臭い事は言うまでもありません。カビ防止魔法をされてない書物なら五分経てばカビに完全侵食されてしまいます。ハッキリ言ってヤバイ場所です。そんなのここに比べれば可愛いもんだ。条件は最悪です。ラップ音、何かが化けて出る？ そんなのここに比べれば可愛いもんですよ。

大図書館というだけあって、広さはかなりのもの。見渡すほどの膨大な書物。これは絶景の部類に入りますよ。山のとっぺんから、地上を見下ろした時の広大な景色と似ています。まあ、あそこまで圧巻ではないのですが。

知識量は最大級といっても過言ではない、ウチの図書館。そこで私は、雑用兼司書補佐を主な仕事としているのです。

図書館と言っているだけあり、それなりに来館する者も少なからず存在します。ただし、ここは私のような愉快な悪魔達の住まう巢窟だけあって、人間が出入りする事はほぼないので。つまり、来館するのは大体がそれらの類の方々。

本日も一人、来館なさったお客さんを案内してしました。なんでも、お目当ての書物を見つけたのは良いが帰り道が分からなくなってしまったとの事。これも、ウチの図書館あるあるです。

地上も地上で、これまた広く。廊下が延々と続いてます。それも窓がない為、日当たりは完全に遮断されている。仄かに明るく照らす蠟燭の灯りだけが頼りきり。これがなかったら、完全に真つ暗闇ですよ。夜目の効かない私には到底出歩けない。

「物凄く広いんですね、ここ。迷子になりそう……」

「そうなんですよ。初めて来た方はほぼ確実に迷子になっちゃうんですよ〜」

「実際に迷子になった私が言うのもアレなんだけどね……」

朱鷺色の羽を持った少女の妖怪はそう言い、落ち込んでしまう。

「そう言わないでくださいよ。元氣出して。誰だつてこの道を通つてきてますから。何も落ち込む事なんて無いですよ。かくいう私だって、最初は迷子でした。よくパチユリー様に世話を焼いてもらつてましたから」

「そうなんですか？」

「はい、それはもちろん。貴女のように、かつての私はそりやもう方向音痴でした。しょっちゅう迷子になっていましたよ。でもね、そんなある日、図書館の一角で隠し扉を見つけたんですよ」

「え、図書館に隠し扉なんてあったんですか!？」

「あつたんです。実はこの図書館には、夜な夜な少女の囁き声が聞こえてくるという噂があつたんです。『1人だと寂しいよ、誰か私と一緒に遊ぼう』……って。それで、主様に聞いてみたら、この図書館の何処かにある隠し扉の向こうから聞こえてくる、との事」

「そして、偶然にも司書補さんが見つけてしまったと……」

「そうなんです。最初は扉の壁絵かなって思ったんですけど、ちゃんとドアノブがついてましてね。本物だったんですよ」

「……もしかして、開けちゃったんですか?」

震えた声で尋ねてくる彼女。よく見れば、肩が小刻みに震えてるじゃありませんか。妖怪とはいええ、まだ幼い少女。この手の類の話は怖くて当たり前。

これはからかい甲斐があるな、と思つてしまった私。小悪魔的な悪戯心に火が着いたのは、言うまでもありませんでした。これは面白いものが見れる、そう確信したからです。

「開けようとはしましたね。でも、あくまで噂程度にしか信じていなかった当時の私は、

扉の先はきつと倉庫なんだろうなって思っていました。ですが、その時ですよ。扉の向こうから少女の囁き声が聞こえてきたんです」

「うわあ……本当だったんだ」

「噂話程度にしか信じてませんでしたからね。でも、聞いちゃったんですよ。これはもう、いよいよもって真相を確かめるしかない。そう思い、意を決して扉を開けたんです」
固唾を飲む音がはつきりと聞こえた。

「そしたらね、奥に続く道があつたんですよ。この先に何かがある、間違いない。そう思った私は、足を踏み入れたんですよ。……そしたら、生暖かい風が頬を撫でていったんですよ」

「あ、これ絶対にヤバイ奴ですよ」

「まあまあ、まだ話は続いてますから。そんでね、奥に続く道がこれまた迷路みたいに入り組んで、中々奥に辿り着かなかつたんですよ」

「そんなに広かつたんですか!？」

「大図書館の隠し扉ですからね。きつと、財宝か何かを隠す為に用意してたんですよ。まあ、それを見つけて少しお金の足しにしようかなとか考えていたのも事実ですよ」

「あ、意外とお金には汚いんですね」

「しっ！ それ言っちゃダメ」

しまった、うっかり余計な事を言ってしまった。お陰様で、恐怖色に染まっていた少女の顔が素面に戻ってしまったではないですか。やだもう、私ったらお茶目さんなんだから。……自意識過剰ですみません。

さて、恐怖の続きです。集中しなければ。

「まあ、そんな邪な考えを抱きつつ冒険家精神で奥へ奥へと進んで行っただんです。すると、突き当りに達したんです」

「結局、何もなかったんですか?」

「いえ、また扉があつたんですよ。もしかしたら、声の主はこの向こう側にいるのかも知れない。と思つて、扉に耳を澄ませてみたんですよ。そしたら、さっきの少女の声が今度はハッキリと聞こえたんです……私の背後から」

「え……嘘でしょ。扉の向こう側じゃなくて?」

「はい、向こう側ではなくて私の真後ろです。それも耳元で囁くように」
「あわわわ……」

いよいよ話はクライマックス。私は彼女の背後を指差しながら言いました。

「そこには誰もいないはずだったのに、不気味な笑みを浮かべた少女が、『ねえ、私と一緒に遊ぼうよ』と言つて、私の背後に佇んでいたのです!!」

「やつほー☆」

「うぎやああああっ!!!」

たまたま彼女の後ろを飛んでいた、金髪の少女が声を掛けてくる。話のクライマックスと丁度良いタイミングで来たので、朱鷺色の羽の少女は断末魔の様な悲鳴を上げて気を失った。

「おりよ? この子、凄いい声上げて気を失っちゃったけど大丈夫? 何かに取り憑かれたのかな」

「いやいや、それは無いですよ。たまたま怖い話をしていたら貴女様が通りなられたんです」

「へえ、ちなみにどんな話?」

「私とフラン様が初めてお会いした時のお話ですよ。アレは今でも思い出すと怖いんです」

「あー……なるほどね、アレは傑作だったわ。この子みたいに悲鳴上げながら、脱兎の如く逃げ回ってたんだもの。思い出しただけでお腹痛いわ」

「やめてくださいフラン様。私としては、あまり良い思い出はありません。心臓が飛び出しそうになりましたからね。ああ、思い出したくない。話もしたくない……」

「でも、この子には話してたじゃん?」

「それは、まあ、この娘はからかい甲斐があるな。……と思ったので、怖い話にアレンジ

して聞かせてたんですよ」

「アンタもワルねえ〜」

「いえいえ、フラン様に比べたらまだ可愛いもんですよ。ま、これでも一応小悪魔な者です。すから。一度、悪戯心に火が点いたら止まらない性なんです」

フランドール・スカーレット。目の前にいるこの少女こそ、先程の怪談の張本人である。

一対の枝に結晶の付いた独特な羽をパタパタと羽ばたかせて、私の腕の中にいる少女をじつと見つめる。彼女は未だ氣を失っていた。そろそろ、起こさないと。

「もしもし、おーい。三途の川から戻ってきなさいな」

「驚いて氣を失ったくらいで、生死の境目に立たされる事なんて無いと思うけど?」

「侮ってはいけませんよ、フラン様。人には個人差っていうのがありましてね。フラン様はわりかし神経図太い方なので、大した事でも起こらない限り驚きもしないでしょう。ですが、この娘は別です。泡吹いて倒れてましたので、念の為脈を測ってみたら脈を打ってないんです」

「ふーん、それってどういう事なの?」

「今、彼女は生死の境目にいるって事です」

胡散臭いな、とでも言いたげな表情を浮かべるフラン様。いや、そんな表情されまし

てもね。私とて、冗談でこんな事は言いませんよ。

面白い反応を見せてくれたこの娘には、本当に感謝です。それと同時に、ちよつとやり過ぎたなという罪悪感も込み上がってきました。ここはお詫びとして、向こう側の世界に逝きかけている彼女をこちら側に連れ戻さないとはいけません。

少女の鳩尾を撫でるように探り当て、一呼吸。

「喝っ!!」

「ぶべえ!」

力強く鳩尾に掌底を食い込ませた。いざという時の蘇生法です。とある中華の方から習いました。くれぐれも、人間相手に使用しないでください。内蔵が破裂します。

咳き込みながら少女は意識を取り戻す。一連の所作を見ていたフラン様は、思わず感嘆の声を上げた。

「あれ、私……何でここに」

「まだ少し混乱している様ですね。さて、お目覚めになられたので外に向かいますか。フラン様はこの後どうします?」

「特に何もする事は無いわ。私も見送りに付き添つても良い?」

「勿論、二人よりは三人。人数が多い方が帰路もまた楽しいものですからね。さてさて、お見送りと参りますか。私に離れずに付いてきてくださいね。ここ広いんで、すぐ迷子

になりますよ」

未だに状況を把握できてない少女の手を、無理矢理引いて館の入り口へと向かう。

「そう言えばさ、図書館でパチユリーが凄く不貞腐れていたんだけど。何かあったか知らない？」

「珍しいですね。パチユリー様が不貞腐れているだなんて。魔法研究でどこか行き詰まったんでしょうかね」

「もしかしたら、司書補さんの帰りが遅いからですかね？」

「それは無いですよ。でも、私も何か大切な事忘れてる気がするんですよえ……あ」
思い出しました。

元々、私はパチユリー様へ何か食べ物を持つてくる事を伝えて図書館を後にしたのです。そこに帰り道が分からなくなって右往左往していた少女がいたもので、案内がてら談話に更けていたのです。あれからのくらい経ったのか、正直分かりません。ですが、パチユリー様の事だから本でも読んで、気長に待つている事でしょう。ただ、少しだけ機嫌が悪くなっているのは確かですが。

「多分、私が食べ物を持つてくると言っただけ、未だ戻つて来ないのが原因かもしれませぬね」

「そうなんですか？ 用事があつた事も知らずにごめんなさい」

「いえいえ、貴女が謝る必要なんてありませんよ。あくまで貴女はこの図書館を利用してくる、大切なお客さんですから。自分を責める必要なんてこれっぽちもないですからね。……でも、どうしましょうか。早いとこ戻ったとしても、そこから作って届けるとなると余計に時間が掛かります」

「あの、もし良ければなんですけど。私もお手伝いしても良いですか？　少しご迷惑掛けてるかもですし……」

「いつその事、ここにいる私達でパチュリーに美味しいご馳走作るってのはどうかな？」
フラン様から名案が飛び出しました。私一人でせつせと急いで作ったりするよりも、こうして今この場にいる人達で協力して作る。これなら、時間も短縮できて一人の時より負担が減る。そして、より一層美味しく愛情の込められた品をお届けできる。こんな素晴らしい案を、使わない訳がありません。パチュリー様はフラン様の事を気が振れているのだの、なんだかあまり宜しくない事を言っていました。ですが、そんな所微塵もありませんじやないですか。誰ですか、そんなデマ流し込んだ人は。その人、かなり性格ひねくれていますよ。目の前にいるフラン様は純粋で無邪気な、他人を思いやる心を持った天使にしか見えません。

てな訳で、即座に実行です。善は急げです。

「フラン様って、中々良い案を思い付きますよね。私、こういうの嫌いじゃないです。む

しろ好きですよ。さて、ここでくつちやべっている場合じゃなくなったので、急いで調理場へと向かいましょう！」

「おーっ!!!」

「あら……何だか賑やかな声が聞こえると思えば、貴女達だったのね」

そこに現れた第四の人物が、私の背後から声を掛けてくる。思わず「おうっ!?!」と変な声を上げてしまう。

「変な声上げないの」

「そう言われましてもね。突然背後から声を掛けられると、当然驚きますよ。変な声の一つや二つ、上がりますって……。所で、こんな所で何してるんですか咲夜さん。館主様から離れて大丈夫なんですか?」

「それがね、お嬢様からお暇を頂いたのよ。急な話だったし、最初は断ったんだけど。無理矢理お暇を押し付けられてね。手に余るものだから、どうしようか考え事しながら散策してたの。そしたら、何だか賑やかな声が聞こえたから来てみたって訳」

十六夜咲夜。彼女はこの紅魔館の主に仕えるメイドです。同じ仕える者として気が合うので、時々仕事の愚痴を言い合う間柄でもあります。

この咲夜さん、実は凄いですよ。何が凄いのかって? それは、この魔族が住まう館で唯一の人間なのです。でも、これだけでは咲夜さんの凄さというのは伝わりませ

ん。多分、今の聞いたただけだと酔狂な人間が紅魔館に住み込みで働いてる。という印象しか得られないと思います。

そこで、もう少し咲夜さんについてお話しします。この咲夜さん、紅魔館の一切を一人で受け持っているのです。冗談を言っているんじゃないやありません。マジです。ガチです。リアルガチなのです。一切と言いましたが、家事全般・財形管理・雇用管理・その他諸々。それらを全て、この一人の人間が受け持っているんです。どうです？ これなら少なからず凄味が感じるはずですよ。

一人でこんな事を全てこなすなんて、時間を止めないとしても無理。そう思うはずですよ。でも、この咲夜さんは恐ろしい事にできちゃうんです！ 人の皮を被った化物ですよ。

スーパーマンも裸足で逃げていくに違いはない。そんなモンスターウーマンこと十六夜咲夜さんが、何故にお暇貰って手持ち無沙汰でいるのか不明です。ですが、彼女が戦力として加われば時間を一気に短縮できます。それこそ、お釣りが返ってくるくらいレベルですよ。

「それでしたら咲夜さん、少し力添えしてくれませんか？」

「みんなでパチュリーに美味しいご馳走を届けようって、お話してたの。昨夜も一緒にやらない？」

「そうね。特にこれといった用もないし、別に良いわよ。所で、そこにいるトキは侵入者？」

「トキ……つて、え、私？」

「何ですか、その世紀末にいそうな名前の呼び方は。図書館を利用しに来た、私の大切なお客さんです。変な呼び方しないでください。帰り道が分からなくなつて困つていた所を、私が案内してたんですよ」

「そう、なら安心。ここん所、物騒になつてきているからね。特に泥棒が良く入り込んでくるし、みんなも泥棒には気をつけて」

「何の注意喚起かは知りませんが、一応気をつけときます」

「それじゃ、パチユリー様への素敵な差し入れを作りに行きましょう。みんな、私からはぐれないように一列で付いてきて」

「はーい」

「なんで貴女が引率し出してるんですか……」

ぽつと出が、少女達を引率していくだなんて。ちよつとジエラシー感じちやつたじゃないですか、こん畜生。

ポーン、と私の嫉妬を代弁するかのようには時計台の鐘の音が鳴り響く。それと同時に、先頭を歩く咲夜さんの足が止まる。後ろを歩く私は突然止まった咲夜さんに、ぶつ

かりそうになった。

「危なっ?! 急に止まってどうかしました?」

「……………」

「あれ、咲夜さん。おーい、聞いてます? もしもーし、咲夜さーん。返事をして下さいってば」

「何かあつたんですか?」

「ん、なんかね咲夜が急に立ち止まってさ。案山子みたいになっちゃって、うんともすんとも言わなくなってるみたい」

「死後硬直?」

「生きている人に限って、それはあり得ませんから。それより、咲夜さん聞こえてるんでしょ。黙ってないで、何か喋って下さいよ。マネキンみたいで怖いですから。てか、後ろ姿美人じゃないですか。綺麗なうなじ見せてんじやないですよ、こん畜生め」

憎まれ口を少し叩きつつ、咲夜さんの肩を強く掴む。これなら、振りほどいたり何かしらのアクション起こしてくれると思つたのです。しかし、それでも相も変わらず無言を貫き通すのでした。

流石に腹が立つてきたので、ちよつとどついたる。そう思い始めた時、咲夜さんが振り返つた。

「なんだ、聞こえてるじゃないですか。もう、変な悪戯はやめてくださいよね？」
「……………」

虚ろな眼差しで薄っすら笑みを浮かべている咲夜さん。ついさっきまでの咲夜さんは何処へやら。

「ねえ、さつきから咲夜何も言わないんだけど？」

「どうしちゃったんでしょうね。鐘が鳴ってから突然ですよ、ちよつと怖いんですけど……………」

「咲夜さん、流石にこれは笑えない悪戯ですよ。いい加減にしてください！」

その時でした。ゴトリ、と何かが床に落ちる音がしたのです。音源は目の前。つまり、咲夜さんのいる位置からでした。

「……………つ!? フラン様、君、目を伏せて!!」

この後の光景は、幼い少女達に見せるには衝撃的過ぎました。咄嗟に目を伏せさせたのは言うまでもありません。

床に転がった咲夜さんの首が、音も無く溶けて消えていったのです。

謎解きは談笑の合間に

騒動を聞きつけてやって来た門番に事情を説明した後、私達は広間へと場所を移してしました。門番曰く、館の主が臨時の集会を開くとの事。要件は察してはいますがね。

私とフランお嬢様、戦々恐々としている朱鷺子ちゃん（名称が無いので、以降このように呼ぶ事にしました。本人から了承も得ている）。二人分横になれる大きなテーブルの向かい側、そこには館の主、門番、パチュリー様が控えていました。重々しい空気に萎縮しそうになる。

「では、本件に関わった者達が揃ったので始めるとしますか。さ……じゃなくて、美鈴、例の物をもって来てくれるかしら」

「了解です」

「ちよつと美鈴、真剣な場の雰囲気壊すようなニュアンスはやめなさい。シバくよ？」

「あ……申し訳ないです、レミリアお嬢様」

紅美鈴、紅魔館の門番兼庭師。由緒あるこの館を長年に渡り、外部の者から守り切ってきたベテラン妖怪。咲夜さんが赴任する前までメイド長も勤めていました。ここ最近になって咲夜さんという優秀な人材が着任した事により、メイド長の仕事を彼女に後

任する事になります。今までブラック企業並みの重労働（以前も話しましたが、メイド長の仕事は多岐に渡ります。ストレスフルになるのはいうまでもない）を強いられてきた反動により、お陰様で事あるごとにシエスタという名のサボりに興じている、ちよつと残念な方です。でも、仕事している時の彼女は凄いですよ？ あと、話してみるとかなり人間臭いのが特徴的です。

いつも笑みが耐えない彼女。実は笑い話が大変お好きなようです。フランお嬢様の良き話相手でもあり、一緒になつては花畑を駆け回つたり、談笑している姿を見かけます。最近の悩みは、笑いの沸点が低くなつたとの事。

……やっぱり前世は人間だったのではと、疑つてしまいます。いや、むしろ彼女は人間なのかもしれません。外見上、特に妖怪らしい特徴が見当たらないのです。普通は角やら羽やら何か生えてるものです。ただ、仕事をしている時の姿が人間の領域を突破しているからこそ、妖怪（重労働を強いられても、息一つ乱れず平然としていられる体力おばけ）と呼ばれているだけかもしれない。そこについては彼女のみぞ知る所なのです。

そして、この館の主。レミリア・スカーレット。

私達が住まうこの紅魔館の現当主であり、五百年もの年月を生きた吸血鬼。パチュリー様よりも長く生きているのだから、ただただ恐縮です。また、フランお嬢様の姉で

もあります。ですが、見た目が幼い少女という事もあって、時と場合によつては威厳を感じられない時があるのだそう。この事に関して本人もわりかし気にしている部分なので、これ以上突っ込んだ話はできません。追々お話するとうましよう。今は命を奪われかねないもので。

「はいはい、そこまでにしておいてくれる？ アンタ達の漫才を見る為に呼び出した訳じゃないでしょう？」

「そういえばそうでした。こほん、ええつと……ではこれより、臨時集会を始めます。では、早速ですが……」

「ちよつと美鈴、進行役として始めるのは良いのだけれど、それより私が言った例の物は持つて来たの!？」

「あ……すみません、お嬢様。今すぐにお持ちして参ります！」

「……もう帰つて良いかしら」

早々に私の主様は帰る素振りを見せ始める。まだ始まつてもいないのに帰るとは、さすが引き籠りの鑑。私達にはできない事を平然とやつてのける、そこに痺れる憧れるう……なんて、私が呑気な事言っている場合ではありませんでした。あ、冷たい視線を感じる。どうどう、ドウドウ。

「まだ始まつてもいないのに、帰られるのは困るわパチエ。私が寂しくなるわよ?！」

「そんなの知った事ないわね。だって、このままの調子でいけば貴女達、すぐ漫才を始め
るんだもの。私がいる必要ないわよね？」

「分かったから、さっきのは謝るわ。さて、話を戻すわよ。どうやら、アンタの使い魔が
咲夜の悲惨な末路を目の当たりにしたそうじゃない？ どんな状況だったのか、説明し
てくれるかしら」

「私に聞いても説明できる訳がないでしょ？ 相手を間違ってるわよレミイ。今のはウ
チの使い魔に尋ねるべき所」

「つと、失礼。少々寝ぼけているのもあるのかしらね。美鈴、目覚まし代わりに紅茶淹れ
て頂戴な」

「はいはい……つと、どうぞ」

「ん、ありがとう」

淹れたての紅茶を一口含むと、レミアお嬢様は私の方に視線を向ける。朱鷺子ちゃ
んは未だに戦々恐々中。見かねたフラン様が宥めている。うん、ちよつと微笑ましい光
景です。見方を変えれば、猛獣に今にも喰われそうな雛鳥の図ですが。

「えつと……、私が咲夜さんとお会いしたのが丁度、フラン様と朱鷺子ちゃんを厨房へと
連れていく時でした」

「朱鷺子ちゃん？」

「ダジャレ言ってるのではありませんよ!」

「ちよつと、お花摘みに行つてくるわ」

「パチュリー様はここぞと言わんばかりに帰ろうとしないでください! ああ、もう!!

シリアスが台無し!!」

興ざめたパチュリー様は、早速帰ろうと席を外す。元凶はきよとんとした顔で、『私
が何かしたのかしら?』と、美鈴に尋ねている。その問いに、振るえる表情筋を必死に
抑えつつ『いえ、何もしていませんよお嬢様』と答える美鈴。意外にも、美鈴は笑いの
ツボが浅かった。

「シリアルはそこそこ好物ではあるけど、今の一連の会話に駄目になる要素なんて無い
じゃない?」

「ぶふっ!」

あ、このお嬢様天然ですね。

更なる追い打ちに美鈴は耐え切れず、とうとう嘔き出してしまった。膝から崩れ落
ち、床で四つん這いになって身体を振るわせる。『美鈴ー!!!』と、叫びながら抱き寄るレ
ミリアお嬢様。

「ああ、一体どうして美鈴がこんな酷い目に……」

「お、お嬢様。とりあえず、一旦離れてもらえますか?」

「嫌よ、私が離れたら貴女が笑い死しちゃう！」

「そもそも、そうなってしまった原因がお嬢様にあるんですけどね……」

「嘘だっ！ 私はこんなにも美鈴を深く愛し、側近としてコキ使わせてあげてるのに。まだまだ愛が足りないと言っても言うの!? ひどい事言わないでよ美鈴。犯人は他の誰かに違いないわ！」

「いや、多分他に犯人とかいないと思います。てか、痛いです。そして軽くデイスらないでください。あ、痛っ。いてて……」

幼い体形からはとても想像できない怪力が美鈴を締め上げる。当の本人は痛がる様子の美鈴に気付いていない。おおよ、おおよと演技をしてるかのような声で泣き喚く。

あそこまで暴走するレミリアお嬢様も珍しい。やはりと言うべきでしょうか、内面では激しく動揺していたのでしょう。冒頭の威厳ある姿など今は何処にもありません。ただの泣きじやくる少女（独特な泣き方をする御齡500の吸血鬼）ですよ。コレがいわゆる、カリスラブレイク。と、何処かの誰かが称していましたね。誰かは知りませんが。

鈍い音がした。それと同時に、美鈴は目を白くしたまま物言わぬ屍と化した。多分、限界を超えたんでしょう。何がとまでは言うまでもありません。

「呆れた。この為に呼ばれただなんて……さて、要件は済んだし帰るわよ」

「いやいや、何の要件が済んだと言うんですか。現在進行で収集のつかない状況になつてますけど?」

「ああ、アレは放つておいても大丈夫よ。時間が経てば落ち着くから」

「いや、アレはどう見ても落ち着けそうな気配はしませんけど。むしろ、より悪化しそうな勢いですよ。……あ、美鈴さんがダストシユートされました」

「燃えるごみは月・水・金……」

「言つてる場合ですか!」

慌てて美鈴を回収しに向かう私。その場からミリも動かぬ主に憤りを感じつつも、一向に意識の戻らない彼女を背負う。私にはない、彼女の豊胸を背中に感じて更に憤りは増しました。……一本背負い投げしちやつても良いですよね? いや、ダメですよね。無防備な彼女に申し訳ない。

テールに彼女を放り投げる(決して私怨があつた訳ではありません)。パチュリー様の所へ向かうと、そこにはフランお嬢様、朱鷺子ちゃん、レミリアお嬢様の三人が寄り添い合つてパチュリー様の胸中ですやすやすと寝息を立てていた。私を見るなり、少しばかり困つた表情を見せる。

「いつの間に寝かしつけたんですか」

「眠気がくる魔法をちよちよいつとね。それよりも、このままだと私が動けないからど

うにかしてくれないかしら?」

「すみません、もう少しこの尊い光景を目に焼き付ける時間をください」

「変なところで欲に素直なのね……三秒だけなら許すわ」

「圧倒的感謝っ!!!」とところでパチュリー様。レミリアお嬢様が仰っていた『例の物』とやらは、一体何だったんでしょうかね?」

「紅茶の事よ。煩わしい言い方していたけど、特に意味はないわ」

「変に含みのある言い方しますね。本当に何かあるんじゃないかって、身構えてしまうからやめてほしいものです。余計な所まで気を遣いたくありません」

溜息をこぼしてしまう私。さつきまで戦々恐々としていた私自身がバカに思えてきました。

懐にしまっていた葉巻を取り出し、先端に火を点ける。

「すみませんパチュリー様。ちよつと一服してきます」

「お好きにどうぞ。……あ、小さい子達がいるから窓際でお願いね。私もあまり煙たいのは好きじゃないから」

「分かってますよ。ちよつと横通りますよ?」

一旦冷静になりたいのもあったので、私は館内の数少ない窓(ちようどパチュリー様の背の向かい側にある)へと向かう。その際、パチュリー様の胸中で眠るレミリアお嬢

様たち諸々を起こさないように、慎重に進む。今だけは、パチュリー様との二人の時間を大切にしたいのもありますから。

口内に溜まった煙を吐き出す。開いた窓の隙間を縫うように外へと出ていく。その先には雲一つない夜空。山があつて、緑があり、水面から霧が立ち込める不思議な湖がそこにある。心なしか、遠くの方から「アタイはアタイの限界を越える、アタイ最強——!!」と木霊した。……そんな気がしました。彼方で氷の翼を持った何かがきりもみ回転しながら落ちていくのも、きつと葉巻の煙が見せた幻影なのでしょう。

「ふぐりっ!？」

奇妙な声景色に見惚れていた私を我に返らせる。振り返ってみれば、赤面したパチュリー様が静かに鼻をかんでおられました。

「……悪いけど、窓閉めて。煙、逆流してるわ」

「良いですけど、その前に一つだけ確認してもよろしいでしょうか？」

「できれば手短にお願いなね」

「痴女ですか？」

「はったおすわよ?」

横つ面を張るといふ言葉を身をもって体験した、デリカシーに欠ける残念な使い魔がいたそうです。それは一体誰でしょう？

そう、張れた頬をすさる私でした。

「痛い……言う前に手が出てるじゃないですか」

「余計な事を言う人が悪いのよ。私はいつだって悪くないわ」

「先ほどの発言は百歩譲って私が悪いとしても、いつでも悪くないと仰るのはまた違ってきませんか？ パチュリー様自身が悪かった場合というのものもあるでしょうに」

「何よ？ 遠回しに理不尽だとも言いたいのかしら」

「率直に言えば、そうなりますね」

「……もう一度はったおすわよ。今度は全力で」

「ごりごりの理不尽の暴力!? あ、ちよつとパチュリー様。右手光ってます。濃い魔力を感じます。それはさすがにシヤレにならないですよ」

「アンタの場合は因果応報ね。特別サービスで筋力強化マシマシよ」

「本当に脈絡もない事を言いますね。何なんですか、今日はどうしたんですか？ ちよつと頭冷やしましょうよ」

「そうね、まずはこの子達をベッドまで運びましょう。……いえ、アンタが運んで行けばさつきまでの事はチャラにするわ」

「わあー、何とも慈悲深いですー（棒読み）」

「戻ってきたら覚えてなさいよ？ 私の慈悲を無下にしたことを後悔させるわ」

満面の笑みでそう仰るパチュリー様の目は笑っていませんでした。ここにきて、ちよつと行き過ぎた冗談を抜かした事を後悔する私でもありません。まあ、なんにせよ小悪魔的な性分が働いてしまつて、ついイジリたくなつてしまうのですから。これは無意識ですし、しようがないですよ。……誰か、私に救いをください。お願いします。

助け舟をよこす存在は誰一人としていない状況の中、私はレミリアお嬢様達を抱えて寢室に連れて行くのでした。



「さて、お開きにしましょう」

「パチュリー様、一つ物申したい事がございます」

「何かしら？ 私は今、とても気分が良いから何でも聞いてあげるわよ」

「ちよつと前が見づらいんですが……どうなつてんでしょうかね？」

「んー、知らないわねえ。というより、ちよつと何言つてるか分からないわ」

両の頬が張れ、頭にコブの山が連なつた、この世の全ての醜い生き物がドン引いてしまふような顔をしている使い魔がいました。

……悲しい事に、私です。

自分の主がさきほど、あんな物騒な事を言っていましたので、『こりや逃げるしかないな』とか思つてこつそり館を抜け出そうとしていたのです。しかし、うまい事逃げられるとも思はずもなく、館の外へ一步踏み出した瞬間にあつさりと捕獲されました。広間にいたはずのパチュリー様が扉の影で待ち伏せていたのです。……いつの間に？

それから先は少し記憶が飛んで、今に至ります。何が起こつたのは分かりませんが、気が付いたら両頬が張れて、頭にコブの山ですよ。怖いですよ。私の怪談話のネタが一つ増えましたよ。

「意外でしたよ。まさか瞬間移動して待ち伏せていたとは、誰が予想できませんでしょうか」

「私から逃れられるだなんて思わないでよね。二万年は早いわ」

「まるで宇宙拳法家の弟子みたいな台詞ですね。あと、パチュリー様って喘息でしたよね？ あんなに激しい運動なさって大丈夫なのですか？」

「んー、誰にも言つてなかったけど最近ね、どうも喘息が治つたみたいなのよね。シヨツク療法で治つちやつたわ」

「……え、それともう無敵じゃないですか。弱点らしい所がなくなつた究極生命体ですよ。そのうち考える事をやめそうで怖いです」

「考える事をやめてしまつたら、さすがに魔法の研究ができなくなるわ。とりあえず、そ

「こまでの存在ではないと否定しておくわ」

「ですよねー……。ところで、宇宙と言えはなんですけど。私が留守番している間に月に旅行に行つてましたよね。どうでした？」

実は以前に、レミアリアお嬢様が唐突に『月に行きましょう』とか言い出した事がありました。『滅茶苦茶も大概にしるよ！』と、パチュリー様もこの時ばかりは珍しく激昂していたそう。まあ、結局ロケットを製作して行つてきたみたいですけど。

「あー……。うん、まあ、そうですねえ。地球は青かった……。かしら」

「奥歯に物が挟まる言い方しますね。なんか良からぬ事でもあつたんですか？」

「ない事にはないわ。でもね、月での出来事はなるべく語るなとレミィから釘を刺されているのよ」

「よつぽど何か良からぬ事があつたんですね。あまり触れない方が良さそうですね」

「ええ。でも、これだけは話せるわ」

「何でしょうか」

「向こうに行つて喘息が治つたのと、肉弾戦ができるようになった事かしら」

「ぶふっ!？」

噴き出してしまいました。パチュリー様に肉弾戦は、さすがにミスマッチ過ぎます。

眉をひそめるパチュリー様。

「何よ、何がおかしいのよ？」

「いやだって……、パチュリイ様に肉弾戦つてあまりにも想像できなかつたものでして」
「人は見かけによらずつて、よく言うでしょ」

「いくら何でもそれは有り得ないです。キャラとかイメージが大分崩れます。そもそも、誰からそんな事を教えてもらつたんですか？　ちよつと気になります」

「とある宇宙拳法家よ」

「すみません、ちよつと何言つてるか分からないです」

「さっきの私の台詞パクるな」

「え、そんな事ないですよ？」

事実、何を仰つてるのかこの紫もやしきぶ……とと思っていました。でも、そこは私澄ました顔でそんな事毛頭も考えていないふりを、演じ切つてみせるのです。

都合の良い展開も大概にしろよ、と言いたい気持ちを理性で抑え込むのです。

「……さて、お遊戯もここまでにしませう」

小さくつぶやくパチュリイ様。その瞳には先ほどとは打つて変わつて真剣なものになつている。ここまでの会話の流れを断ち切つて話す事といえは一つ。

「この一連の騒動、その犯人が一体誰なのか皆目見当はついていないわ」

「え、こんな適当な会話してる間に見当ついたらんですか!？」

「私を一体誰だと思ってる？ ただの引き籠りと思つてたら大間違いよ」

「一応、そう思つてました。それ以外に何か当てはまるものなんてありませんから」

「……この件片づけたら真つ先に貴女への対処を検討しておかないといけないわね」

「見当ついただけに、処遇を検討すると……やかましいわ。自分で言うてて恥ずかしいです」

「その心意気は買つてあげる。健闘しなさいなつてね」

「……………」

お互い低レベルの親父ギャグに悪寒を覚えた私達は、しばし顔を見つめ合つたまま気まずい空気を過ごす羽目になりました。

「紅茶が余計に冷めたわ。まあ、いいわ。話を戻すわよ」

「例の件の犯人ですよ。一体誰なんですか？」

「そりやもう、貴女以外にいないでしょ？」

「……はい？」

「ごめんなさい。聞こえていなかったようね、もう一度言うわよ？ よーく聞きなさいな」

「あ、はい」

「今回の騒動の犯人は貴女です」

「すみません、聞き間違えではないですよ？」

「聞き間違えではないわね」

随分とあつさりど、何も溜めもなく言い放った一言に彼女は目を丸くしていた。

「隠しているつもりだっただろうけど、ソレは漏れ出ているものよ咲夜」

「……………」

「教えてくれないかしら？ 貴女はこんな事をするような輩じゃないはずよ」

「その前に、私からも教えてくれないかしら？」

声色は変わり、先ほどよりも冷徹でいて何処か儂げのあるもので彼女、十六夜咲夜は私に問いかけてきた。

謎は謎のまま今日が来る

「教えてくれないかしら……」

儂く、どこことなく悲しみを含む声。瞳にも同じ感情を乗せて私を見つめる。

「そうね、どこから話せば良いのやら……」

かくいう私は少し困り気味でいました。実の所を言うと、カマを掛けていただけなんです。

確信を得ているかと言われたのならば、それは微塵もありません。ですが、ある程度話を聞いたら一つの仮説が浮かび上がってきたのです。

それはとても単純なものです。人の目に触れない瞬間を突いて咲夜は変装し、もう一人の自分を置いたのです。そう、分身です。

彼女には並の人間を超越した能力がありました。ただでさえハイスペックが過ぎますが、何よりも彼女を彼女たらしめる証があるのです。それが時間を操る能力です。この能力が意味する所は言うまでもありません。任意のタイミングで時間を停止させたり、加速させたりする代物です。

「一瞬だけけど、咲夜には誰にも見られていない時間を作る事ができた。騒動から今に

至る経緯を話してくれた際に、その箇所が1つだけ存在していたわね。フランとこの子の視界を遮れば、咲夜だけになる。その一瞬、時間にして数秒程度かしら……貴女にはこの一瞬の隙ができれば、後は時間を停止させて犯行に及んだって所ね。能力の応用次第で分身も作れる事から、咲夜以外に犯人は居ないのよ。でも、その犯人が自ら溶けて消えてしまい状況を更に混乱させる。まるで、犯人は別にいる……そんな展開にまで持っていこうとしたのは、ちよつぷり感服ね」

自分が主犯と分かってしまうような、そんな稚拙なやり方をこの瀟洒極まるメイド長がやる訳がない。ひと手間、ふた手間掛けて架空の犯人像を作り上げるくらいはやつてのける。完全犯罪もお手の物である。やるならば徹底的に完璧に。それが十六夜咲夜だ。だからこそ、腑に落ちない。

「概ねその通りです。さすがパチュリー様と言った所。この程度であれば推理する必要もないですよ。朝飯前と言った所でしよう」

「だからこそなのよ、咲夜。なんで貴女はこんな事をしたのか、まったく腑に落ちないわ。話せる事は話したわ。だから今度は私の番、教えてくれないかしら？ 動機を知りたいの」

「動機、ですか……。割と単純ですよ。新しいエンターテインメントをお送りしたい、そう思っただけです」

「なるほどね。確かに単純な動機だわ。でも、それにしては小細工が拙かったわよね。時間に常に余裕のある咲夜にしては、らしくないつたらありやしないわよね。よほど、何かに追い詰められるような事でもあったのかしら?」

「いえ、これもまた単純な事でした。材料調達が間に合わなかったのです」

「……は?」

腑に落ちそうだが、腑に落ちなかつた私でした。

動機はなんとなく理解できた。でも、調達が間に合わなかつたとはこれ如何に? 咲夜なら時を止めてでも調達を間に合わせられるように帳尻合わせはお手の物な筈である。

「恐らく疑問に思っているでしょう」

「いちいち言わなくても思ってたわよ。……んで、納得のいく理由があるんでしょ?」

「ええ、ございます。それを調達する……というよりは、流れ着いた物から探し出さないといいけませんでした」

「と、言うとは?」

「無縁塚をどこ存知でしょうか?」

無縁塚。そこは幻想郷と外界、更に法界や冥界、天界等の数多の世界が折り重なった場所、特異点とも呼んでいる。忘れられた存在達が最後に辿り着く場所であり、謂わば

墓場でもある。

「確か外界から存在を忘れられた物達が流れ着く場所よね。まあ、あんな場所だから物探しには一苦勞するでしょうね」

「二応、付近に住み着いてる鼠娘にも協力を仰いだのですが、見つからずじまいだったのです。」

「でも、それとこれとは何も関係がなくないかしら？」

「いえいえ、少しでも時間稼ぎに……と思つて、最後の悪あがきをしていたつて所ですかね」

「咲夜らしくない采配ね。そこまでさせる程、よほど必要不可欠なものだったのね」

「そう……ですね」

いつもの澄ました顔ではない、曇らせた顔の咲夜がそこにあつた。

ここまで話を聞いて、私は益々腑に落ちないでいた。でも、それと同時に咲夜をそこまで杜撰な振る舞いにしてしまう物の正体が、気になつてしようがない。まだ色々と聞きたい事はあるけれど、時間は有意義。いつまでもだらだらとしていると、咲夜が骨になるまで引き伸ばしかねない。……魔女たる私には関係ないが、咲夜が仕える我儘お嬢様な友に申し分がないの。

「ところで咲夜、貴女をそこまでさせる物つてのが気になつて仕方がないの。この際、

はつきり言ってもらえないかしら？ 気になって眠れそうにないわ」

「すみませんパチュリー様、流石に申し上げにくいと言いますが……」

「何をもつたいぶる事ないでしょうに。というよりも、この騒動の主犯は貴女なの。洗いやふやにして片づけるのは研究者たる私としては嫌。レミイだって納得しなわよ？」

「お嬢様が……納得しない？」

「そうよ」

私と咲夜以外の声が割って入る。

「割と手短に済ませてくれると思っていたんだけどねえ……。長いわよバーチエ」

「どこぞの時空で極太レーザー砲をまき散らしてそうできて、私の事を罵倒しようとしたけど寝起きで呂律回ってないのか、開口早々寝ぼけた事を言わないでもらえないレミイ？」

大あくびをかきながら寝ぼけた事を抜かしたレミリアがいた。

「うむ、眠気覚まし代わりの長ツツコミご苦労様。口が妙に冴えているじゃないの」

「腑に落ちない状況に、余計な事をしてくれる大変ありがた迷惑な存在が来たからね。

虫の居所がかなり悪いわ」

「あら大変。そんな悪い虫は私がやつつけちゃうんだから」

「アンタの事よー！」

てへっ。と、舌を出して自分の拳で頭を小突くレミリア。あざとい、実にあざとい。あざとさが極まって、私の怒りのボルテージが限界突破しようとしている。でも、ここは耐え時。咲夜から納得のいく説明を、

「痛たたたっ!?!」

レミリアが突然、右腕を振り回しながら悲鳴を上げた。よく見ると、その腕には何かに噛まれた跡がついている。……人の歯型であった。だが人の歯型にしては犬歯の部分が深めに刺さったのか、2つの点の傷口となっている。まるで吸血鬼にでも噛まれたかのようなだ。

レミリアの様子を観察していたから気づけなかったが、当人の背後に同じ背丈の少女が1人立っていた。どことなく虚ろ気な緋色の瞳、背中には歪ではあるもの美しい七色の結晶体。それが対となって存在する羽。

「止しなさいフラン！ 痛いでしょう!?!」

「んー……いちご大福が喚いてる……」

フランであった。

睡眠魔法の効果が薄まりつつあるからであろうか、意識がやや朦朧としている。今の

彼女には、レミリアがお菓子に見えている様であった。懲りずに嘯みついた箇所には再び嘯みつく。そして再び上る悲鳴。この姉妹、コントをしに来たんか。

事態がややこしくなる前に二人を眠らせる。お互いに激しい攻防を繰り返している隙をつき、睡眠魔法を唱える。すると、あつけもなく深い眠りについた。次は半年くらい起きない程の効力で、念には念を入れる。

「余計な茶番が入ってしまったわね。話を戻すわ。貴女がそこまでして探してた物つて、一体何だったの？」

「……ロケットに関する資料よ」

咲夜の口から出た言葉に、嫌な記憶が蘇った。

かつて、私達紅魔館組（個々の名前は略称させて頂きます）は月に行つた事がありました。冗談ではなくて、本当に。

んで、月行つてなんかよくわからん姉妹にきつちよんきつちよんにされてトラウマ植え付けられて、我が家に戻ってきました。月面旅行を甘く見ていました。

以降、この事については誰も口にしていません。

どこの書物によれば、私達の行いは第二次月面戦争と呼ばれ語り継がれているらしいです。

「まさか、また月に殴り込みに行く気だったの？」

「いえいえ、そういつた訳ではございません」

「なら何なのよ？」

「……新しい催し物を準備していたのよ」

★

『退屈だわ……新しい刺激が欲しいのよ』、その一言が何よりも重く響いた。

春風薫るバルコニーでお嬢様は飲みかけのティーカップをテーブルに置き、静かにそ
う仰つたのでした。

「新しい刺激？」

「そう、新しい刺激よ。ここ最近は何の異変も起きやしなもの……霊夢の所に行つても
冷たくあしらわれるし、退屈なのよ。誰も何もかも私にとってつまらないものになつて
きたものだけわ。世も末よ」

「世も末ではないでしょう」

呆れた私はお嬢様の発言の、主に最後の部分を否定しました。世紀末をこの方は見た
とでも言いたいのでしょうか。真相はお嬢様のみぞ知りますが……

「5度ほどは見ているわ。どれも辿つた末路は似たようなものばかりだったわ。故に私
は退屈なのよ咲夜」

「確かに、お嬢様は私の生まれる前の世紀の末をご覧になってきてきましたね。とはいえ

ですよ、5度程度で物申すのは些か軽率なのではないのでしょうか？」

「……何よ、不満？」

ふくれっ面を見せるお嬢様。

「不満ではないのですが、あの胡散臭い妖怪よりは経験という点では私達は劣るでしょう……不愉快ですけれども」

「ぐうの音もでなくなるから困るのよね、そういうの……」

お互いに肩を落とす。気まずい空気と静寂が漂い始める頃に、私は口を開いていた。

「それならば、新たな催し物を考えてみませんか？」

「何か案はあるのかしら？ うまくいった試しがないような気がするのだけれど」

「そうですね……あるにはあります。ですが、まだお嬢様にお伝えできるほどの案は残念ながらご用意できていません」

「あら、残念だわ。詳細を聞きたかったのだけれど……まあ、いいわ。とりあえず、整理がついた頃に伝えて欲しいわ。くれぐれも、私を幻滅させる事だけはやめてよね」

「ええ、もちろんです」

だって私はお嬢様に仕える瀟洒なメイド、十六夜咲夜ですから。

★

「でかい口を叩いたものは良いもの、具体的な案は決まっていなかった。でも、レミイの

前では虚勢を張ってでも成し遂げようと無茶していた途中だった訳なのね」

「仰る通りです」

で、咲夜の目論見は勘の鋭い私にバレてしまい白状しちゃったって訳。

もうどうにでもなれ、と言わんばかりの顔が表に出ているのは無視した私は一つ提案をすることになりました。

「この際、時を巻き戻すつてのはどうよ？ そんな時にこそ生きる能力だと思わないかしら？」

「そうですね、そうしましょう」

「お、そこは嫌ですとか言わないのね。てっきり『時間がもつたいない』とかでも言うかと思っただけで」

「皮肉にしてはもう少しまともな表現というのはなかったのかしら…」

「なんだって魔女だからね」

「納得のいかない理由があるとうございます。引きこもり過ぎて降り積もった埃臭がい塩梅ですよ、パチュリー様」

「あら言ってくれるじゃない…!!」

お互いに隙あらば悪口を言い合うこの不毛な争い。果たして、誰得だというのでしょうか？ きつと言うまでもありません。でも言っちゃいます。そんなのは無いに決

まってるのです！

「咲夜、もう止めにしましょう。こんな茶番に付き合ってるほど私も暇ではないの」

「今更言いますか…？　今この瞬間、このやり取りこそ『時間がもつたいたい』です。それにきつと内心では『とにかくそれを言わせてみたかっただけ』とか思っているのでしょうかね」

「勘の鋭い人は嫌いよ」

「レミリアお嬢様のお世話をしている賜物です。そのようなお方に貴女様は世話になっているのです。もう少し感謝があっても良くては？」

いつの間にやら咲夜の犯行動機の話から、悪口に変わり、感謝をするように強要されているではありませんか。あれ、なんか趣旨変わってたくない？

日頃の鬱憤が溜まっていてもおかしくない量の仕事を毎日一人で請け負っているからこそ、普段レミイ・フランの前では言えない本音をレミイの友人で居候の身分である私に吐き出している。そう考えると、私は納得した。いや、してしまったのだ。

気づいてしまったのだ。自分の置かれている立場というものにも。

私は今、嫌な汗をかいている。理由は目の前にいる十六夜咲夜である。ただ、それだけだとまるで意味が分からないと思うでしょう。ええ、当然です。勘の良いガキなら気付いて錬金術で亀甲縛りでもするでしょう。

「咲夜、一言だけ言わせもらおうわ」

「感謝以外の発言を私は認めません」

「辛辣ね、でもここは貴女の発言を蹴つてまで言わせてもらおうから!」

私の瞳に闘志が宿るのを感じる。この発言を喉奥に引つ込めてしまうと、真つ赤に燃え盛る拳（火の魔法が勝手に発動してた。ナニコレ怖い）が勝利を掴めないと吼えているから。

一步、力強く踏み出す。深く息を吸う。全身に酸素と魔力が巡るのを感じたら、拳の前に突き出す。真つ赤に燃え盛る拳は咲夜の鳩尾に吸い込まれていく。

「時間がもつたいないんだあああつ!!!」

その日、幻想郷に巨大な火柱が立つた!という話で持ち切りになった。

ところで、パチュリー・ノーレッジは魔女である。

「どうした急に?」と、思うでしょう。私もそれは同じなのです。うん、まるで意味が分からないいわね。閑話休題。

魔法について日々研究に取り掛かっているものでして、気付けば人間やめているし魔法と呼ばれるようになっていた。

だからなのでしょうか、『凄まじい知識量がある』と勝手なイメージがついてしまったのかも知れない。探偵依頼が来た時は、そりやもうお断りしたわけなのよ。でも、依頼

主がどうしてもそこを譲らない頑固者だった訳でしてね。

結果から言うとう依頼を引き受けました。根負けしました。アイツ、ここぞと言わんばかりの我儘を發揮してくれたんだもの。腐れ縁でもなければやっていけないわよ…。

腐れ縁…まあ、綺麗な言い方をするとう友人という括りになるのでしょうかね。

咲夜の不審な動向はずっと前から、友人に筒抜けの状態であつたのです。様々な目を通してね。

久しぶりに小悪魔的な悪戯心といえますか、なんといいいますか。せつかくだから、ここは楽しませてもらおうと思つた訳。

私のやることは最初から一つ。咲夜にお灸を添えるだけ、という実にシンプルな事です。いい感触でしたよ、二度と味わえないものだから尚更貴重体験です。

「ふう……」

手に持つていた筆を机に置く。傍には、先ほど私が書き記していた日記帳がある。羅列している文字は昨日あつた出来事についてのものであつた。

「いやあく、それにしても役作りつてものは大変でしたね！」

大きく背伸びをする。数時間もの間、椅子に座りっぱなしで書き物をしていた体の所々から骨の鳴る音が聞こえてくる。特に背中の骨が立て続けに鳴つた後のすつきり勘が少しクセになる爽快感を与えてくれた。

「……音がうるさい」

眠たげな様子で私の少ない発散行為に異を唱える者。

「一夜漬けで書き業務だなんて聞いてなかったんですよ？ これくらいでピーピー言われるのは理不尽です。少しくらい多めに見てくださいいよ〜」

「いやよ」

「そんなあつさりきつぱり言われると余計に傷つきますからあ!!」

端的に話す彼女は機嫌の悪い表情に更に眉間に皺をよせた。あらら、端正な顔立ちがもつたえない。このまま鬼にでもなつちやうのかもしれない。

「鬼にまではならないけど、鬼並みの腕つぶしで灸を添える事はできるわ」

「あらやだ、心の声が読まれるだなんて。プライベートーってものが主様にはないんでしようか?」

「主だからこそよ。そういうわけだから、そこに座りなさい。従える者への再教育を私自らの手で行つてあげるわ。光栄に思いなさい」

「終わる頃には破片も残っていないんでしようね〜」

「よくわかつてるじゃない。そこだけは褒めてあげるわ」

「わあ、ありがたや〜って思いたいけど、思つちやいけないこの感じは一体何なのでしよう?」

「主従愛つていうのよ、後世まで覚えておくように」

力任せに振るわれた拳が私の頭を捉える。

轟音が今日も木霊する紅魔館で、小悪魔な私はパチユリー様のパワハラ教育を受けるのでした。